

日本薬剤学会 (APSTJ) ニュース

5

PSWC2007が成功裏に終了



◀FIP会長のKamal Midha氏(左)からResearch Achievement Awardを受賞する杉山雄一氏(右)

杉山雄一氏・寺田弘氏がAwardを授賞

PSWC2007(世界薬科学会議)が4月22～25日まで、オランダのアムステルダムで開催された。世界72カ国、約2,500人の参加者のうち日本からの登録者は約250人で、開催国のオランダに並ぶ規模であったという。

オープニングセッションでは、オランダ文部科学大臣 R. Plasterk氏、FIP会長K. Midha氏の挨拶に引き続いて、ヨーロッパ医薬品審査庁のエグゼクティブディレクターのT.Lonngrrenn氏やオルガノン社副社長のD.Nicholson氏が世界の医薬品開発の現状について特別講演を行った。

また、薬科学において優れた研究業績を挙げた9人の研究者にResearch Achievement Awardが授与され、日本からは東京大学大学院の杉山雄一氏および東京理科大学の寺田弘氏が受賞した。4日間開催されたPSWC2007では日本薬剤学会会長の橋田充氏が組織委員会のコチエアーのひとりを務め、また多数の日本薬剤学会会員による招待講演も行われるなど、世界の薬学の舞台における日本のポジションの大きさが表れた形だ。

バイオ医薬品の同等性など注目のトピックスを議論

PSWC2007のメインテーマは「薬物治療の最適化：全人類の健康に向けて」。本テーマのもと35のシンポジウム、10のラウンドテーブルが開催された。シンポジウムでは、最新のDDS技術、標的化合物の設計、レギュラトリー、PAT、品質保証などがトピックスとして選ばれ(シンポジウムの詳細なレポートは7月号に掲載予定)、ラウンドテーブルでは、バイオ医薬品のジェネリックの開発を担保する同等性の問題などについて活発な意見が飛び交った。

また、大学院生など若手研究者主体による「Young Pharmaceutical Scientists Meet in Amsterdam」がプレサテライトミーティングとして4月20、21日に開催され、全体で400人、日本からも若手研究者約100人が参加した。本ミーティングは、発表の多くが口頭で行われるとともに運営も若手研究者自身によって行われるため、若手にとって国際学会の運営や発表という貴重な経験が得られる場としての位置付けをもつ。また、PK-PD、遺伝子デリバリーなど最新の研究成果の報告が行われるということもあり、多数の参加者を集めた。

プレサテライトミーティングからPSWC2007まですべて参加すると1週間という長期にわたる学会であったが、いずれの会場も「サイエンスのカットングエッジ、創薬の新しい方法論」に触れられるため、参加者は大きな刺激を受けたようである。

薬学教育も重要課題

会議に先立ち、ユトレヒト大学で薬学教育に関するプレサテライトワークショップも開催された。日本では現在、薬学6年制がスタートしているが、韓国、台湾でも6年制を検討中であるという。本ワークショップは、研究者と薬剤師育成の2本柱の教育に成功しているオランダ、イギリスの薬学6年制のカリキュラムについて学ぶとともに、日本、韓国、台湾の薬学教育の現状と課題などを議論する目的で開催され、熊本大学の入江徹美氏が日本での経験を報告した。

次回のPSWCは2010年11月にアメリカのニューオーリンズで開催される予定。毎回8,000人以上が参加するアメリカ薬学会(AAPS)の年会と同時開催されるため、日本からも多くの参加者が見込まれている。